

雁坂小屋に暮らして

松田守一

秩父の雁坂小屋の小屋番をやらないか、と古い山友達のNから電話があった。

鬱蒼とした森林と谷の美しさに魅かれて、若いころから秩父を歩いてきたが、最近の名の知られた山に登山者が集中する傾向にあり、見通しのよくない林の中や谷底を好んで歩く人は少なくなってしまった。秩父でも雲取や甲武信などの小屋は、時には泊まりきれない人で溢れることがあるようだが、他の小屋はどこも管理人を常在させるだけの利用者がいない。経費の面からも連休と夏休み以外は無人となることが多いという。

雁坂小屋も大滝村川又の山中将市さんを中心に、数人のボランティアが交代で登り、登山者の世話をしてきた。しかし、それぞれに勤めを持っているので、なかなか思うにまかせない。「誰か適当な人はいないだろうか」ということになり、定年後、何もせずにぶらぶらしている「あいつなら」と、わたしに白羽の矢が当たらしい。

長年山に親しみながら、サラリーマンの日曜登山は、いくらこまめに歩きまわっても、所詮は「点と点を結ぶに過ぎない」「山に暮らして山と面で接することが出来たら」という思いは何時も頭の隅にあったので、この誘いに心は動いたが、突然のことだったので即答も出来ず電話を切った。

その後、現地と何度かやりとりのすえ、とりあえず連休の前後半月ばかり、体験入山して様子を見ようと決心して、ボランティアのメンバーに加わることにした。以下はかけだしの小屋番の生活日記抄である。

月〇日 朝から気持ちよく晴れて爽やかな一日。 連休にそなえて、昨年秋から閉じたままになっている小屋の整備のため、以前から小屋の管理にたずさわっていたTさんに同行して三時に小屋に入った。山裾は新緑に映えていたが、小屋の入り口には一メートルの残雪が見られ、ここはまだ冬のままである。陽がかげるとさすがに寒い。すべての作業は明日からにして、早々に小屋に落ちつく。ストーブがごうごうと気持ちよい音を立てて、「いよいよか」と心の昂ぶりを覚える。

月〇日晴れ、午後から雲ひろがる。

五時半、目を覚ますと窓が明るくなっていたので、外に出たら、太陽はすでに山の端を離れていた。一晩中吹き荒れた風はすっかり治まって静かな朝である。澄んだ空気を揺るがせて鶯の音が明るく響く。

Tさんはもう起きだして働いていた。日が暮れると寝て、明るくなったら起きる。これが山の生活なのだ。早く馴れなくては...

人の生活には「火」と「水」が欠かせない。朝食後、まず水源の様予を見に行く。例年になく残雪が多いので、とりあえず水の心配はなさそう。百五十メートルほど離れた豆焼沢の雪解け水を硬質のビニールホースで小屋まで引いている。雪の重みで切断された部分を補修して、蛇口から水が音を立てて迸りだした時にはホッとした。

次ぎは火である。小屋の周囲の枯れ木は炊き尽くして、次第に遠くから背負いあげなければならなくなった。Tさんはチェーンソーを持って薪集めに出ていった。この間に食器を取り出して洗い、棚を整理して収める。毛布を干す。部屋の掃除をする。こんな澄んだ空気の中でも、半年分の埃の多さは驚くほどだ。

あれやこれや、今まで登山者として利用していた時には考えてもみなかった。小屋の仕事は際限なくある。日暮れまで休みなく働いても、客をむかえる準備は終わらない。まさかこの山の上で風呂に入れるとは考えもしなかったので、思わずえっ！と聞き返してしまった。小鳥もなき止んで、暮れなずむ静寂のなかで、首まで湯に浸かって手足を延ばす。なんとこの贅沢か。今日も八時前に就寝した。

月〇日曇り時々薄日さす。霧の去来が激しい。十時、Tさんはあせび峠まで荷上げに行く。この小屋の食料はすべて人の背に頼っている。

わたしは昨日、Tさんが刻んだ薪を背負いあげる。枯木だが水を吸っている。直径五十センチ長さ六十センチのブロッカー一つが二十キロはある。往復二十分、半日で十個上げるのがやっとならなかつた。でもこれで三日分はある。

二時過ぎに二名がテントを張る。これが連休最初の来訪者。

月〇日 晴れ、夜になって雨となる。

峠への林の中の道は一メートルを越す残雪、これが腐って歩くと、足の付け根までズブズブささり、皆が難渋しているので朝から雪かき、昨日に続いて薪運び、薪割り、部屋の掃除、寝具の運び込み、トイレの掃除などなど、今日も汗だくの日だった。午後、Nが手伝いに登ってきた。

宿泊六名、テント二張り。いよいよ連休がスタートしたが、天候が安定しないせいか登山者は少ない。

月〇日曇り、霧が深い。

小屋の朝は早い。三時半にストーブを焚き付け炊飯器に点火する。夏山では五時には出発するからもっと早くなるという。明け方に雨はあがったが、濃い霧で何も見えない。今朝の気温は八度、暖かい。夜中にも溶け続けて、小屋の周辺の雪は半分に減った。

みんな出発して静かになった部屋の掃除、食事のあと片づけ、馴れないこととて、一通り終わってホっとした時には十時を過ぎていた。

昼を過ぎると、もう早着の登山者がやってくる。すべての準備は昼までに終わっていなければならない。

二時にOさんがやってきた。Oさんは秩父市に住むサラリーマンで、以前この小屋に泊まったのが縁となり、都合をつけては手伝いに来ているとか。夕方にはYさんが加わった。Yさんは地元の郵便局の職員だ。これで五人、スタッフがそろって小屋も賑やかになった。夕飯はYさん持参の野菜と肉で豚汁を作り、ストーブを囲んで遅くまで山の話に花が咲いた。

月〇日夜来の雨は、時に風を伴って一日降り続く。

甲武信へ笠取へ、それぞれに登山者は予定通り出発して行った。みんな申し合わせたように、カラフルなレインウェアに身を包み、ロングスパッツを着用して、一分の隙もない出で立ちで敢然と雨の中へ出てゆく。ただただ感心するばかりだ。

YさんとOさんは今日も荷上げにゆく。ご昔労さま。小屋に入って一週間、馴れないこともあって、うろうろするばかりで、余裕などとてもなかったが、雨で外の仕事が出来ないので、久し振りに今日は日記を整理したり、自分の思索の中に閉じこもって過ごす。

はじめ、話があったときには、小屋を拠点にして写真を撮っ

たり、気が向いたら付近の山を歩いたり、自分本位の甘い夢を見ていたが、この一週間の生活で、山小屋のような制限された中では、自己を捨て共に汗を流して、そこに自分の世界を見つける喜びを実感した。今までしたことのないトイレ掃除も、「この小屋のトイレは本当に綺麗で気持ちがいい」との登山者の一言で何でもなくなる。

まだここに来てから、シャッターは一度も押していない。十五分上の峠にさえまだ立っていない。報酬を得ての仕事ではないので、ここではそれぞれが何をしようとするとも誰も干渉しない。しかし、自分の楽しみを追求よりも、共に苦しむ方が喜びが大きい。連休を過ぎても、小屋番を続けてみようと思う。

月〇日 くもり。夕方より風強くなる。

今日の泊まりは二十名。小屋は活気に包まれて、賄方は大忙し。受付、部屋割り、寝具のセット、夕飯の支度、どこから手をつけていいのかわからず戸惑うばかりである。この点、Yさんは流石に手馴れたもので、てきぱきと小気味よく客を捌いてゆく。

荷上げ、薪の調達など外回りの力仕事はTさん。小屋内の客扱いはYさん。炊事関係はわたし。誰が決めた訳でもないが、自然に分担が決まったようだ。ガス釜とはいえ、一升八合の水加減は見当がつかず、炊きあがるまで心配で落ちつかなかった。何とか食べられるご飯が出来て胸を撫でおろした。

月〇日 久しぶりに陽光を見る。

晴れるとみんな気持ちも軽くなるのか、Nは小屋裏のベンチにコンパクトなCDカセットを持ち出して、ボリュームをいっぱい上げ、野外コンサートを楽しんでいる。Yさんは洗濯に余念がない。わたしもカメラを肩に付近を散策した。天候は安定しないが、気温が高いので雪はどんどん溶けて、もう草の青さが目につくようになった。石楠花の蕾もころもころと白く膨らんできた。春が足早に山肌を駆け上がっているのがひしひしと伝わってくる。我無者羅に歩き回っていた時には気づかなかった微妙な感触だ。今夜の泊まりは二十三名。

月 日 雲は多いがやっと天気は持ち直したようだ。

連休が終って山も静かになった。早いもので小屋生活も半月になる。来週また出直して来ることにして、午後山を下る。